Sophia Dormitory Study Tour

湘南の海で環境問題を探求

3つの寮から14人が参加

7月2日、枝川寮、祖師谷国際交流会館、アルペ国際学生寮、3つの本学直営寮では、2023年度第1回「Sophia Dormitory Study Tour」を神奈川県藤沢市内の湘南ビーチ等で実施した。日本人学生と留学生合わせて14人の寮生がツアーに参加し、海の環境問題について探求した。

予測困難な時代においては、未来に対する優れた洞察力・構想力や、多様な価値観の中で自身の強みを最大限に発揮しながら他者と協働する力を身に付けることが重要だとされる。直営寮では、キャンパスを飛び出し、社会課題に直接触れて学べる寮独自の教育プログラムを開催している。SDGsや社会課題に取り組む現場に赴き、現地での体験や人との触れ合いを通じて寮の仲間と課題解決を探求すること、将来役に立つスキルを身に付けることを目的としたツアーで、寮生は誰でも参加可能だ。

湘南ビーチでゴミ拾い

第1回のテーマは「湘南の海をフィールドにSDGsの本質理解・実践」。参加者は、海洋プラスチック問題の現状などに関する事前学習、湘南ビーチでのゴミ拾いや講義を通じて、海ゴミ問題の根本的な解決のために、行政、企業、市民が一体となった取り組みが必要なことを学んだ。

その後、「海の環境問題の解決に向けて私たちができること」と題して、単なるボランティアではなく、自分たちが起業し、収益をあげて持続ができるソーシャルビジネスを提案する課題を与えられた。参加者たちは4つのグループに分かれ議論し、皆の前でアイデアを発表した。

あるグループでは、ゴミが落ちている場所が分かるアプリを開発し、ゴミを拾って貯めたポイントを協賛企業の商品と交換できるようにする。企業への還元は、環境に配慮した企業としての宣伝・ブランディング効果につながるといった建設的な提案をしていた。

発表終了後には、参加者同士が投票や評価を行い、好評のうちにツアーが終了した。

スタディーツアーは今後も場所を変え実施する予定だ。

パラ卓球で共生社会を考える

Go Beyondメンバーなどがボランティアで参加

8月30日から9月2日までの4日間、東京体育館にてパラ卓球「2023 ITTF PARA JAPAN OPEN」が開催された。本学から、ソフィアオリンピック・パラリンピック学生プロジェクトGo Beyondのメンバーとサステナビリティ推進本部の学生職員がボランティアとして参加した。

同大会は、国際卓球連盟が主催するパラの世界大会で、各国のトップ選手がパリパラリンピック出場につながる世界ランキングポイントをかけ、白熱した戦いを繰り広げた。

Go Beyondメンバーで大会運営に携わった濵井南咲希さん（外英3）に感想などを聞いた。

▼この大会に参加しての印象は？

本大会は、パラ卓球という競技のユニバーサルな魅力を通してダイバーシティ&インクルージョンを発信し、「アイデンティティとプライド」の大切さを伝えるというものでした。試合を見るだけでなく、「PARA HEROes展」「パラすごろく」といった体験ブースをとおして、来場者が楽しみながらパラ卓球の魅力を知り、固定概念にとらわれず誰もが輝ける社会について深く考えることができました。

▼実際にどのような役割を担いましたか？

体験ブースの運営に加えて、試合のボールパーソンも経験しました。パラ卓球はパラスポーツの中でも多くの障害をサポートする競技です。不自由だからこそ繰り出した個性豊かな選手たちの独創的なプレイを、緊張感漂うコート内で間近に見ることができました。

「パラすごろく」を説明する濵井さん（左から2人目）

▼今後のGo Beyondの活動に向けての抱負を教えてください

私自身、身近に感じにくいパラスポーツの魅力をどうやって多くの人に伝えられるか悩んでいましたが、本大会に参加することで、共感の輪を広げるためのヒントを得ることができ、希望を感じました。

今後Go Beyondとしても、新たな切り口でこれまでアプローチできていなかった人にパラスポーツの魅力を伝え、共生社会の実現に向けて取り組んでいきたいです。

町づくり、人づくりを提言

北海道八雲町と相互交流

中高生には授業を実施

本学は2015年度から北海道・八雲町と交流事業を行っている。夏期休暇中に本学学生を八雲町に派遣し、現地において酪農や漁業などの体験、地域の人々や中高生と交流しながら、町づくりに関する提言を行うというプログラムだ。今年度は9月13日から15日の日程で、留学生を含む本学学生12人が八雲町を訪問した。

酪農の現場を視察

今回の交流プログラムでは、水産加工場の視察をはじめ、函館～札幌間の北海道新幹線トンネル工事現場視察、チーズづくり体験、酪農見学、中高生への授業などを実施。

最終日には、八雲町教育長をはじめとする町関係者の前で、学生一人一人が3日間で感じた八雲町の「課題や強み」、「教育・人づくりへの提言」について発表を行い、SNSを使った町のプロモーションや中高生による外国人観光案内など、町の活性化のヒントになるアイデアが続々と出された。今後、提言は事後課題レポートとしてより詳しくまとめられていく。

今回、交流事業に参加した佐野萌華さんに体験談を寄稿してもらった。

体験談

八雲町での交流活動

佐野萌華（文仏2）

今回の交流事業では実際に八雲町内の学校を訪れ、八雲中学校では上智大学について知ってもらい自身のキャリアを考えることと、八雲高校では英語を用いて「マイストーリー」を語り合ってもらうことをテーマに、我々学生が主体となって授業を行いました。

企画の段階では不安があったものの、生徒の皆さんが楽しんでいたり、将来のことについて自分なりに考え発信している様子を見て、我々が八雲町を訪れた意義が十分にあると感じ、大変うれしくなりました。改めて、八雲町関係者の皆さん、今回の交流事業にかかわってくださった上智大学学生センター職員の皆さん、そしてともに交流事業に参加してくださった上智生の皆さんに心からの感謝を申し上げます。

中学生への授業風景
（本人右から2人目）

秋の就活イベント

キャリアセンターの積極活用を

10月から総合就職ガイダンスなど続々開催

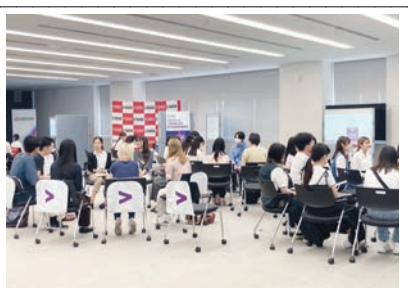
キャリアセンターでは、9月20日、21日にOB・OG訪問会を、10月2日、5日には「第4回総合就職ガイダンス」を行った。

■OB・OG訪問会

48社を招き、2日間にわたって四谷キャンパスで開催された。対面形式での開催は約3年ぶり。

訪問会は就職活動における選考対策ではなく、さまざまな部門で活躍しているOB・OGとの交流をとおして、自身のキャリアを考える機会とすることが目的。

学部3年生だけでなく、1・2年生も参加可能で、2日間で延べ約450人が参加した。会場では「大学での学びが仕事でどのように活かされているか」や「海外で働く際に意識すべきことは」といった質問が学生から投げかけられ、OB・OGとの活発なコミュニケーションがあった。


OB・OGの体験談を熱心に聴き入る

参加した学生からは、「多様な業種についているOBの方からお話を聞くことができ、自身の将来についてビジョンを持つことができた」「複数の会社の方々に一つの会場でお会いできるため、社風や魅力を比較できる貴重な機会だった」との感想があり、キャリアを考えるヒントを得ていた。

■総合就職ガイダンス

学部3年次生、大学院1年次生対象の10月の「第4回総合就職ガイダンス」は、まだ本格的な活動を始めていない学生と、夏休みのインターン等への参加など、一定の活動を開始している学生向けに2回に分けて開催した。ガイダンスでは、活動の第一歩の踏み出し方や、本選考に向けたレベルアップの図り方について説明を行った。

11月は、8日に「自分に合う応募先の探し方」、28日に「本当に伝わるES・面接のポイント」を解説するガイダンスを開催予定。年内に実施する総合就職ガイダンスはこの2回のみのため、ぜひ参加してほしい。その他にも内定者アドバイス会や公務員業務説明会など、多数のガイダンス・セミナーを予定しているので、積極的な活用を。（詳細はLoyola「就職・キャリア支援」参照）